

「令和6年度飼料用米多収日本一 関東農政局長賞」受賞者の取組概要

【受賞者の成績】

褒賞名	氏名	所在地	品種	作付面積	10a あたり単収	地域基準単収との差
関東農政局長賞	すずき ひでふみ 鈴木 秀史	茨城県下妻市	夢あおば	約 10.2ha	715kg/10a	+170 kg/10a

【経営形態・経営面積・作付品種及び多収品種への取組状況】

経営形態	✓ 本人、妻、母による家族経営で、令和7年から常時雇用1名を確保。 ✓ 経営全体の面積は約 34.3ha。現在は規模拡大に専念。この他、下妻市大宝地区生産組合のブロックローテーションの小麦約 45ha・そば約 40ha について、組合員の一人として共同作業を実施。 ✓ 令和2年から義父の経営を引き継ぐ形で就農(ガス会社から転職)。
飼料用米の経営面積 その他作付品種	✓ 飼料用米(夢あおば)約 10.2haを生産するほか、主食用米(コシヒカリ、にじのきらめき)約 15.6ha、小麦(さとのそら)約 8.4haを生産。
取組の経緯・期間	✓ 義父の代から飼料用米の作付けに取り組んでいたが令和2年の就農以降はコロナ禍による米価低下への対応策として、経営安定のために水田活用の直接支払交付金の交付を受けようと思い、飼料用米の作付けに取り組んだ。

【Ⅰ:生産面の取組】

品種の選定	✓ 多収性、耐倒伏性、及び作期分散による効率化を期待して「夢あおば」を選択した。
育苗	✓ 5日ごとにローラーで苗踏みし健苗育成。自動灌水装置で灌水を簡略化。
田植え	✓ 移植期は5月 15～25 日。令和4年からロボット田植機を導入している。 ✓ ノウハウが無くとも高精度の田植えが可能で、作業効率化により疲労が軽減される。 ✓ 水のある程度張った目印の無い田でも機械的に作業できる。 ✓ 整った田植えになるので、うね間での雑草の繁茂や施肥の偏りを予防できる。
多収に向けた 施肥管理	✓ 2月に堆肥入り「土壌改良資材(稲サポ)」を 45kg/10a 施用。 ✓ 5月の田植えと同時に「マジ軽一発ドラゴン(一発基肥)」を 38 kg/10a 側条施肥。 ✓ ドローンにより7月 10～15 日に「空散追肥 306」を 10 kg/10a 施用。
施肥作業の 省力・コスト低減	✓ 営農支援システムの KSAS により各ほ場の施肥量等を記録・管理している。 ✓ xarvio フィールドマネージャーの生育ステージ予測を参考に追肥時期を決定し、ドローンで施肥を行う。 ✓ 以前は流し込みによる追肥をしており、ムラがあった。ドローンはムラなく施肥ができ、30～60 kg程度の増収が見られた。
病虫害防除	✓ 育苗箱にナエファインを施用するほか、田植機に搭載した箱剤のゼクサロンパティードを田植えと同時に施用し、効率化を図りながら防除。
雑草防除	✓ 以前は田植えと同時に一発剤を使っていたが、ほ場によって十分な雑草防除ができなかったことから、現在は田植えと同時に初期剤としてクラールを施用し雑草の勢いを抑え、その後ドローンで一発剤のアシュラ FG 剤を散布し防除。
収穫・調製	✓ 自己所有の施設で乾燥調製から色彩選別、フレコンへのパック詰めまで行い効率化。

	✓ 水分量は 15%以下にはするが、主食用米より乾燥を抑えて費用を軽減している。
--	--

【Ⅱ：経営面の取組】

輪作体系等	✓ 小麦と水稻を2～3年ごとに入れ替えながら栽培する。入れ替えのタイミングは雑草の様子から判断している。(カラスムギが繁茂したら水稻に切り替える等)
作業分散	✓ 早生品種の「夢あおば」を選定したことで、中生の主食用米品種と作期分散している。
規模拡大	✓ 地域の担い手として、年々経営規模が拡大している。令和2年から令和7年にかけて経営面積は約2倍となった。
流通コスト低減	✓ 玄米でフレコン出荷している。JA及びその他集荷業者に出荷し、県内流通を行う。 ✓ 100～150 俵程度は軒先販売を行っている。
実需者ニーズへの対応	✓ 特になし。

【Ⅲ：地域との連携及び生産技術の普及・啓発】

耕畜連携	✓ 地域内の牛ふん堆肥を利用しているが、稲わらの供給はしていない。
生産技術普及	✓ 特になし。
模範となる取組	✓ 茨城県農業総合センターと普及センターが共催したスマート農業研修で先進事例として紹介された。 ✓ 温湯消毒による種子消毒、有機質資材の施用による土づくり(堆肥入り土壌改良資材：稲サポ)に取り組むことで、みどり認定を受けている。